

みこころ

第17号

2010年
12月25日

発行元:

カトリック城北橋教会 広報委員会

〒462-0847 名古屋市北区金城1-1-57

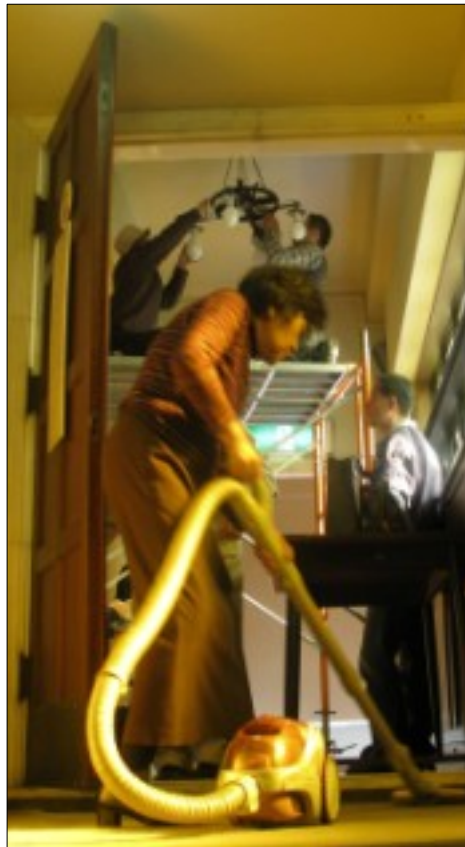
TEL(052)912-7123 FAX(052)935-2254

(HP)http://johokubashi.mikokoro.net



(左)キャット

(下)怖くねえよ...



皆で、
ご降誕の準備をしました



(上)おっしょー！(左)あっぱれ写真家ないでしょー



INDEX 主の降誕号

「カトリック教会の教えから死刑を考える」 プリヨ・スサント神父 (p2~3)

「ヘルマス・アスンビ神父様ありがとう」 (p4)

「神学生日記」 片岡義博 (p5)

「牧野眞、高山貞美司祭叙階25周年グラフ特集」 (p6~7)

「シスター林のおじゃまします セシリア小川リエさんに聞く」 (p8~9)

「洗礼を受けて」山本道隆・山本真優子・平野悦子 (p9)

「短歌」川口伊津子 (p9)

「洗礼を受けて」酒井佳子・岩月陽子 (p10~11) 「心をあらたに」大岡敦子 (p11)

「懐かしき便り」木川千栄・清水綾子・山本光太郎 (p12~13)

受肉の秘義と

その意義

主任司祭 プリヨ・スサント



毎年の降誕祭の日中ミサに決まつてヨハネによる福音(一・一一八)がいつも読まれる。「初めにことば」とば読)があった。ことば(ことば読)は神と共にあった。ことば(ことば)には神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内

に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。言は肉となつて、わたしたちの間に宿られた」(ヨハネ一・一一五、一四)。

「初めに言があった」。このヨハネによる福音の出だしが旧約聖書の創世記の出だし、「初めに、神は天地を創造された」(創世記一・一)を思い出させる。ヨハネは、同じ「初めに」を出だしとして使って、天地創造の前から「言」がすでに神と共にあったこと、「言」は神であったこと、「言」は造られたものではないことを強調したかったであろう。ヨハネはキリスト

を神の「言」とし、新しい「天地創造」である神の救いがキリストによって実現されていることを述べている。

「ことば(ことば)は肉となつて、わたしたちの間に宿られた」(ヨハネ一・一四)。ヨハネは、永遠の神の子である言葉が、イエス・キリストとして人となられたことを、肉となつた、すなわち「受肉」と表現したのである。この神の子の受肉こそ、神の最大の啓示であり、神の働き、神の人間に向かつての語りかけなのである。パウロは、受肉を神の子・キリストが「人間の姿で現れ」た(フィリピ二・七)と表現したが、受肉によってキリストは、人間のようなものとして現れたとか、あるいは、形または外見だけではなく、わたしたちと同じく人間となつたのである。「天」高くに住まわれ人間の世界から遠く離れた神が決定的に人間の世界に介入し見ること、触れること、聴くことのできる人間としてわたしたちの間に住まわれるようになったのである。受肉の秘義は、イエス・キリストが神の完全な自己啓示であることを教えている。神は、「インマヌエル」、「わたしたちとともにおられる神」(マタイ一・二三)となつたのである。

また、神の子キリストが人間となり、わたしたちの生と死を身を持って体験されたことは、人間のあるべき姿の完成をも啓示している。「御子は見えない神の姿であり、すべてのものが造られる前に生まれたはず。……万物は子によって、子のたに造られました」(コロサイ一・一五―一六)とパウロは述べているが、被造物、すなわち天地万物はイエス・キリストという方のために創造され、イエス・キリストによって意味あるものとなったことを教えているのである。こうして、被造物の頂点であり、中心であるのは人間だから、イエス・キリストにおいて人間が完成を得ることになるのである。神の子である方が人間となられたことによってキリストにあずかるすべての人が神の子としてその人間性を完成することができるようになったのである。また、人間はキリストにおいて神と本質的に結び合わされたのであるから、これ以上の人間性の完成はないのである。

「言が肉となつた」こと、すなわち、神の子がわたしたちと同じ人間性をとつてくださったことは、神の愛からあふれる限りない恵みである。ここに降誕祭の意義があるのである。

神学生日記 聖書と典礼の共同 祈願を作っています ヨハネ片岡 義博

皆さん、主の御降誕おめでとうございませう。神学校生活も二年目がもうすぐ終わろうとしています。今年も、これで哲学課程が修了することになり、今、そのまとめの哲学論文を書いている最中です。きちんとまとめ、春から神学課程（福岡へ）行くことができますようにお祈りください。

さて、私は今年四月から、月に一度、オリエンズ宗教研究所でお世話になっております。同所では皆さんが毎週「ミサ」で使われている『聖書と典礼』のパンフレットを制作されています。私を含めた有志の神学生たちは、その共同祈願の箇所の編集作業のお手伝いをさせていただいています。

『聖書と典礼』の共同祈願の箇所を良く見てみると、『共同祈願（信者の祈り） 例文」と記してあります。この例文を神学生たちが作成しているのです。

実は、ミサの『総則』では、共同祈願に関しては固定的な式文を定めています。その意味で、共同祈願は、典礼の祈りの中でも各共同体の創意をもって自主的につくっていくべき部分となります。（ただし、共同祈願の意向の順番として、通常キリスト者、全教会の為、全世界の救いの為、偽政者のため困難な境遇のある人々の為にという原則があります）もちろん、ただ単に祈りを作れば良いものではなく、その日の主日、祝祭日の聖書朗読配分に沿った祈りであればなりませんし、その時季にあった、教会の活動・関心事ごとに沿った例文を作るようにと求められます。

神学生たちがこの例文を作成する意義の一つとしては、先に述べたとおり、聖書朗読配分の構成に習熟すること。それは、第一朗読、第二朗読が福音のメッセージにどう照らし出していくか、そのメッセージを汲み取ることで、将来司祭として説教をしていくためのトレーニングとなるように。また、祈りのこと

ばが共同体のことばであること、を体験的に感じてもらうことも意義としてあるそうです。

神学生たちは、指定された主日の共同祈願の招き、意向、応唱、結びまでをすべてを任せられます。編集会議までに、その指定された日の朗読に目を通し

て、黙想し、決められたルル、文字数に合わせて原案を作成していきます。

そして月に一度の編集会議で、その原案を発表し、担当してくださっている神父様や編集スタッフの方、神学生たち全員で、原案の文章の流れは良いか、テーマに沿っているかなど、それぞれ



れ気づいたことなど指摘が入ります。特に、神学生が良く指摘されるのは、気づかないところで見下したような（上から目線的な）祈りになっていることに気づかされます。そういったことを学びながら、そのアドバイスを受けた上で、さらに第二案を提出し、担当の神父様や編集長の方で、編集会議での指摘があった点の反映具合などをみて、残っている表現上の問題などの確認がなされていきます。

こうして、私の担当した最初の共同祈願がようやく、今月のあるミサで使われましたので、実質半年前から、神学生たちによる汗と涙の共同祈願作業があるわけです。

私も神学校入るまで、神学生が（あくまで有志ですが）そういったことをしているとは知りませんでした。いつものミサの中で、ただ単に流れるかのよう、祈っている共同祈願も、こういった舞台裏を知っていただくことよって、皆さんにもより大切に祈っていただき、私を含め神学生たちのことも思い出して頂けたら幸いです。（写真は、司牧実習先の松戸教会で十月に行われたバザーでの一コマ。餅つきをさせてもらいました）

ア-について考え

趣旨 昨年ひそやかに(?) 開かれた「ケアする人のケアについて考える」会に引き続き、二回目の開催となる。今年、京都で開かれたパネルディスカッションに触発されて、ケアに何らかの形で携わる五名のパネリストが集まっていた。今回は、パネリストのお話を

九月二十三日の午後、城北橋教会A集会室で、聖心の聖母会主催によるケアをテーマにしたパネルディスカッションが開かれました。京都から来られた方も含め六名のパネラーが夫々の体験から問題を提起され、ケアに関心のある司祭、信徒十数名が熱心に話を聞きました。企画から当日の進行まで担当されたシスター林明恵さんにレポートしていただきました。

聖心の聖母会主催・パネルディスカッション

聞きながら、見えてくる現実問題を共有し、信仰共同体で何か支え合うことができないか、特に高齢者のケアを中心に考えたいという趣旨である。はじめに小澤さんからお話をいただいた。小澤さんは今年初旬、京都教区高野教会で高齢者をテーマにしたパネルディスカッションを主催された「慰めの会」の代表である。司祭・修道者・信徒の高齢に伴う問題に深く関心があり、孤立する信者の訪問を始められ、立ち上げられたのが「慰めの会」である。

はじめに、小澤氏(高野教会)小澤さん、受洗以来数々のボランティアを経験された中で、病気の人の関わりをずっと考えてこられた。十年の在米中、アメリカ人の教会や病院でのごく自然なボランティア活動を見て学ばれ、自らのボランティア活動が始まったのだ。特にこの十年は、司祭の高齢化の問題が浮上り高齢者問題に取り組みは



ホワイト神父様と京都・高野教会の小澤さん

じめられた。様々な施設を見学する中で、高齢の司祭の孤独を見て、「神父だけの高齢施設は間違っているのではないか、もっと信者の中にいる環境を作るべきではないか」と思われ、パネルディスカッションを企画された。パネルディスカッションを開催されて一番印象的だったのは、村上神父(糖尿病で足を切断)が「わたしは人の世話をするため司祭になったのだが、今は人の世話になるのに慣れるのが仕事だ。しかし信者の中にいたい。」

ら、信者、未信者問わず、周りにいる人、地域の苦しんでいる人の生きる手助けができないだろうか」と訴えられる。そして「これからますます貧しい人、高齢な人が増えてくる。だからこれから司祭、信者にとらわれないで手を差し伸べることをしてほしい。」と話された。

パネルディスカッション 集まっていたいたパネリストは、ホワイト神父(聖心布教会会員)、小池美枝子さん(ケアマネージャー)、石井サニー

さん(家庭で育児と介護を担っている)、村松雅子さん(老人保健施設介護職員)、加藤京子さん(癌に関する相談員)である。この方々に、一人十五分の持ち時間で、それぞれの現状や信仰体験、必要と感じるケアや希望などを分かち合っていた。

ホワイト神父からは、来日して以来、自身の発病、入院体験から話された。そして、日本人の行き過ぎた「迷惑」を考える意識について指摘された。しかもこの「近所・親戚・会社の人・大人の人に迷惑してはいけない」という習慣は生活の深くに入っていて、「お返しが出来ないから」という理由で、人の親切や協力をなかなか受けられないことを危惧されていた。続いて小池さんからは、外国人支援やケアマネージャーとしての経験から「ケアする人のケアがない」といい介護が出来ない。」と感じることを話された。特に介護現場ではシングルマザーが多く、たくさんの問題を抱えた職員がいるが、この人たちがいなければ介護現場は支えられないのが現実だからである。今常に考えられていることは、「この人が気持ちよくケアを受けるにはどうし

小教区で支えるケ

ある。また、その人の持つ価値観を大切にされた方がいいのか、生活の改善を支援していいのかいつも悩むそうである。今勤務されている居宅介護支援事業の社長は、「ケアマネはグレーでいる、黒になると法律違反だが、白になって介護保険の番人になってはいけない」と言われるそうである。最後に、難民で支援を受けている方が「たくさんの専門家から支援を受けるが、嬉しいのは何でもない人

たらしいか」である。なぜなら、介護保険ではそれぞれのサービスのかなり細かい規定があり、保険だけに頼ってしまえば地域とのつながりや周りのつながりが分断され、個と個が分断されてしまう危険があり、ケアマネも利用者も孤独になる可能性があるのである。実際にケアマネには鬱の人が多いそうである。



が声をかけてくれること。」と言われたことを紹介された。石井サニーさんは、今担われているご家族のケアのことを分かちあってくださった。特に今寝たきりの義父の介護で、強がったりする態度、逆に「迷惑だから」、「自分は邪魔なんだ」といった発言と、フリーピンでの介護した実母とのやりとりの違いを話された。また、家族で介護することを望むが、同時に介護者が身体的、精神的に疲れることを指摘された。そのような時、周りからは、「これができるよ」、「短い時間でも」と具体的なサ

ポートの提供があると受けやすいと話された。逆に「大丈夫？」と言われると、心の中で助けがほしいと思っけていても、「大丈夫ですよ」と言ってしまうのだそうである。村松さんからは、介護施設で働き始める経緯と、現場からの「いのちの叫び」を語られた。特にある利用者との出会いが自身の「いのちへのまなざし」への変化のきっかけとなったことを紹介された。過酷な介護労働が、「それぞれの方と快適な時間を過ごすというとても貴重な時間」に、「大変だという思い」が「お互いの思い伝わり、満たされたという分かち合いの気分が味わえるように」なったと話された。七年経って今、「全然生きる意欲がなかった」のに、「魂の領域がすく癒される・養われる」という実感としてあると振り返る。最後にエフエソニ・二十四

育児と介護で頑張っている石井サニーさん左はケアマネの小池美枝子さん

二を引用しながら「誰かが正しい・正しくないか、誰かが上とか下とかではなく、利用者さん職員も含め、その人をありのまま素直に受け止めて、みんなで共にそこで生きていくことを分かち合える施設であつたらいいと思う。」と思いを話された。加藤さんは、ご自身の闘病とそれに伴う信仰の旅を話してくださった。二年前の直腸癌の告知、患者としての心苦しい心境と孤独、術後に続く放射線治療とそれに伴う症状……。とうとう



癌の相談員・加藤京子さん左は老保施設の介護職員・村松雅子さん

気がも体力も萎えた時に、信仰体験をされた。「乗り越えられない試練は与えない。」この言葉が彼女の「生き返ったように大きな力」となった。二度目の信仰体験は、医師から命の期限を聞いた時であった。ここで、「何も難しいことはないのだ、また一生懸命一日一日を生きていけばいいし、きつと乗り越えられる」とフツと思えた。やがて告知された命の期限は過ぎたが、突然激しい腹痛が伴う腸閉塞で入院を十年繰り返す。焦り、もがき苦しんでいた時、癌の治療以来、同士のよう感じていた周りの人や看護婦らに、「何をそんなに慌てているの」、「ゆっくり休んだらいいじゃない」、「そんなに頑張らなくていいよ」と声をかけられ、自身にとって救いのことばとなった。やがて入院が、自分の心を見る、準備された時間と感じるようになり、感謝の内に、受洗。加藤さんは「病氣と闘うのではなく、病氣と共に歩いて」と認識している。そして、「闘病は」一つ一つはぎ取られ、たくさんのものを手放さなければならなかったが、代わりに見え

ないものが見えるように、また聞こえないものが聞こえるようになった。」と語る。苦しみの内にいただいた恵みが「ゆるぎない基盤」となり、入院回数十五回、七度の危険な手術、現在あるストマが二か所、食事のコントロール、現実として感じる「痛み」「苦しみ」、があつても、「私の心はいつも平安です。」と話された。また「物理的だけでなく心の支えになるキーパーソンの存在は欠くことのできないものだ」と訴えられる。社会から分断されて孤独を感じる患者にとってほしいのは、「自分の病気の本当のところをよく理解してくださり、寄り添って、丁寧な話を聞いて、心で寄り添おうとしてくれる方」である。

最後に、患者を見る周りの人の心のケアは絶対必要であること訴えられた。「患者を見る家族の心がいつもケアされていて、患者に対して自然に笑顔で接せられる状況を作っていただけなら、患者自身は何の特別なこととしてほしいわけではない。家族で普通に生活している時の顔と顔を向け、普通にいられることがお互いの存在が良い支えになり、良い方向に行く。」と話された。

最後に
出席されていた狩浦神父様から一言いただいた。「教会は元

来、地域の最先端フロンティアであり、一つの接点である場、時のしるしだった。『ケア（カ）口：痛みを共にするの原語』は、教会の信仰のベースになる具体的な言葉である。『ケア』から作り出す様々な豊かな言葉をもつて、今の教会での信者との関わりがまた新しく生まれることが期待されるし、このような接点は、『家族』に求められ

ている姿である。『介護』という言葉は今後、『新しい関わり』になっていくのではないか。例えば先ほどの『頑張れ』という『ことば』ではなく、『目配る』のを頑張る。『目』『まなざし』を育てていくことが『頑張る』の意味、だから『まなざし』ことが大切。聖書でも『まなざし』という言葉は多く、『まなざし』と『いつくしむ(痛みの源)』が

いつも大事になってくる。『痛み』は子宮のことばだそう、そういう意味では、「痛み」とは、命の源、「まなざし」のことばを生み出している。感想
実はパネリストのお話からディスカッションに入るはずであったが、時間切れでできなかった。しかし、他教区の方、他の小教区の方々との「ケア」について

考える場があったこと、つながりを持てたこと、関心の共有ができたことに意義を感じた。これからも継続してこのような集いを設けながら、「ケア」に対する信仰者としての理解を深めることに努めたい。今や信仰共同体から具体的に支える場を設けることが求められていると感じるのである。

ヘレンケラー記念音楽コンクールで奨励賞を受賞



ベルナデッタ岩月かほりさんが、十一月二十日に東京・港区の「アートホール」で開かれた第六十回ヘレン・ケラー記念音楽コンクールでピアノの部(小学生高学年)で奨励賞を受賞されました。このコンクールは昭和二十四年に音楽家を志す盲学生の登竜門にする目的で始まったもので、昨年のバン・クライバーン国際ピアノコンクールで優勝した辻井伸行さんら、プロの音楽家を多数輩出し続けている音楽の祭典であります。今年にはヘレン・ケラー女史の生誕百三十年、また

ピアノを弾くことが楽しい ベルナデッタ岩月かほりさん

主催者である東京ヘレン・ケラー協会設立六十周年にあたる節目の年での受賞だけに、お母さんである陽子さんにとっても忘れられないコンクールだったと思います。かほりさんは日曜日のミサでは聖書朗読やオルガンの演奏、あるいは答唱詩編を歌うなど、全く障害のハンディーを感じさせずに典礼奉仕をしてきています。

必要な絶対音感の習得に役立ったと感謝しておられました。今、習っているピアノの先生とも波長がぴったりのようで、これからも明るく楽しくピアノを弾いていってくださると思います。

かほりさん、本当におめでとうございました。綺麗な歌声の方も聴かせてね。

(後藤明憲)

クリスマスの 主役はイエス様

ディンブナ
清水 綾子

主のご降誕、おめでとござ
います。

早いもので、ここタイで二回
目のクリスマスを迎えます。
タイは仏教王国の為、それ程
クリスマス商戦で賑わう・・・
ということはありませんが、や
はりデパートなどに行くと、大
きなツリーが飾ってあり、プレ
ゼント仕様の物が多く売られま

根田信子さん（シ
ドニー在住）から
のの便り

クワイーク神父様
がいらっしやる老
人ホームは聖職者
のためですから、チャペル

クワイーク神父様はご病気で

クワイーク神父様の近況

クワイーク神父様の日常の生
活はこのお祈りが中心になっ
ているように思われます。あ

れず静かな祈りの生活です。

いまは外出されることも望ま
ず、

私は、ごく普通の仏教家庭に
生まれて育ちました。幼い頃は
「クリスマスはケーキを食べて、
プレゼントをもらう日」と思っ
ていましたし、学生時代はアル
バイトでクリスマスケーキを夜
中まで、酔い帰りの人に無理や
り売りつけていた記憶がありま
す。成人してからは「クリスマ
スは恋人や仲間と過ごす日」と
いう世論に何の疑問を抱くこと
なく、毎年ゴージャスなクリ
スマパーティーを当たり前のよ
うに楽しんでいました。でも、
そこにはお誕生日の主役「イエ
ス様」は存在していませんでし
た。いえ、存在していても私が
気付いていなかったのです。

イエス様なのに・・・という
言葉を聞いて、やっと気付いま
した。

その年のクリスマス、城北橋
教会で、初めて、華やかであり
ながらも儼かな、イエス様のお
誕生を祝う、本当のクリスマス
を体験しました。

以前、この「みこころ」に、
プリヨ神父様が「いつからクリ
スマスはロマンチックなものに
なったのか・・・」というよう
な事を書かれましたが、正にそ
の通りで、クリスマスの本当の
意味を知った今は、私毛街の派
手なイルミネーションやサンタ
クロースを見る度に、イエス様
を無視していることに悲しみを
感じます。

クリスマスはイエス様のお誕
生を祝つもの、それ以外に何の
意味もありません。

私のように、「本当のクリスマ
スの意味」を、一人でも多くの

ない限り必ずこの「ミサ」に出
席しておられます。「ミサの
何十分も前にチャペルに入ら
れ、後もずっとお祈りされて
います。

とはすぐ近くに建つMSCの
修道院に行かれたり、新聞を
読まれたりの生活です。
以前はとなりの原っぱをよ
く散歩されていましたが、も

うそれはされてい
ません。九十二歳
になられたと思ひ

龍馬伝と隠れ キリシタン

アウグスチヌス
清水 隆

方に知って頂きたいと心から願
わずにいられません。

「龍馬伝」が終わった。一年
間欠かさず観た。福山雅治は見
事に龍馬を熱演した。作者は岩
崎弥之介を登場させ、龍馬との
愛憎を絡ませてこの物語を引
張った。また四人の女性を龍馬
と組み合わせ花を添えた。こ
の中の加尾とお元はフィクショ
ンだろう。千葉道場の佐那は、
終生龍馬を想い独身で終わって
いるし、お龍は美しかった。海
援隊を長崎で活動させたことで
「お元」という隠れキリシタン
の女性を登場させ、彼女を龍馬
がイギリスに逃げる手助けをし、
「お前が再び日本へ帰ってくる
時は、マリア様を隠れずに拝め
るようにしているはずだ」と。
フィクションでしょうが、作者
はキリスト教に好意を持ってい
る事が伺えます。この幕末の頃、

長崎の浦上にフランス人がフラ
ンス人のために天主堂を建造し
ています。ここに隠れキリシタ
ンが訪れる事になります。大き
な教会、司祭が居る、マリア像
があるということで、初めて訪
れた農民は、「マリア様どこに」
「私たちは貴方と同じ気持ちで
す」と司祭に語りかけます。司
祭は大きな驚きと、感動を持っ
たと。その後続々と信者が現れ
ます。秀吉以来二百五十年余親
から子へ、子から孫へと代々受
け継がれた信仰、これはどう表
現すべきか言葉がありません。
踏絵（一年に一度必ず実行され
た）を悲痛な想いで踏み続けた
と私は思つのですが、心は決し
て売らないと守り続けた信仰を
もつ隠すことなく天主堂を訪れ
るのです。禁教令の中、次々と
捕らえられ、その数何と約三千
人、処置に困つた長崎奉行は、
江戸へどうしたものかと尋ねる
のですが、それどころではない、
薩長軍が進軍してくる、しばら
くは放置されます。残念ながら
明治新政府は、江戸幕府の禁教
令を踏襲します。浦上キリシタ
ンは流刑となり、金沢、津和野
などの地へ船で送られ、処刑さ
れたり拷問で棄教させられる事
になったのです。「龍馬伝」を
楽しく観たものの、その頃に隠
れキリシタンが奇蹟な運命を辿つ
たことに思いを馳せた事でした。

洗礼

ミカエル
富永満夫

私が四月に洗礼を受けて感じたことは、

目の前の光景が不思議な別世界のように感じた。

神の御前に立つているような感じがした。

新しい気持ちになって、新たな道に進んでいる。

という事であった。しかし、人生は悩みが多い。時には信仰がそれによって消失してしまふ事がある。私自身も思わず「神様」と叫んでしまふ。

それは教会に来る前からだった。それで、この教会に来たのは分からない。ただ、自分はやみくもか、無意識に來ているような感じである。ただ神を信じる気持ちというよりは、神を感じていたいという思いの方が強い。時には言葉が聞こえて来るように思える。しかし、身の程を思い知る事も大事である。あまり自信過剰にならないようにしたい。

いのちのための前晩の祈り

典礼委員の方が大慌てで印刷するといふハブニングもあ

教皇ベネディクト十六世の呼びかけで、十一月二十七日、待降節第一主日の前晩に「すべてのいのち（とくに出生前のいのち）のための前晩の祈り」が全世界で行なわれまし

聖体顕示台にご聖体が入入れられ、祭壇の上で顕示されて式が始まりましたが、待降節第一主日前晩の祈り、説教、共同祈願、いのちのための嘆願の祈り、ロザリオの祈り、いのちの福音の祈り、祝福とご聖体の安置、懐かしいタン

トウム・エルゴというように盛り沢山の祈りと歌で終わりました。正直、黙想するどころではなかったというのが感想でした。そこで、改めて名古屋教区二ノース十二月五日号で「日本の教会に向けた司教協議

会に向けた司教協議



盛りの祈りと歌で終わりました。正直、黙想するどころではなかったというのが感想でした。そこで、改めて名古屋教区二ノース十二月五日号で「日本の教会に向けた司教協議

典礼委員の方が大慌てで印刷するといふハブニングもあ

体外受精による余った受精卵の取り扱いなど、医療技術の進展はわたしたちを確かに混乱させますが、「受精卵・胎児は、受精のときから一個人格として取り扱わなければならない」ゆえ、可能な限り、一人の人間としての誠実な保護と世話、ならびに治療を受ける必要があります。（カトリック教会の力テキズム2274）「使い捨ての生物学的材料として人間の受精卵を製造することは道徳に反します」（前同2275）とあります。

「一日のお守り、今日もご苦労様でした」と、常に言えるようにしたい。むしゃくしゃしている気持ちでも、神の世界を感じている私には、死はあまり怖くないみたいだ。どんな苦境にあっても、神は常に傍らにいます。もっと神の世界を感じていたい。神の愛を感じて、もっと素直になつて、受け入れられたら、悲しみがやがて幸せに変わるだろう。今、私は手を組み「神様、私

は・・・」と告げている。それは私の気持ちを神様に捉えて欲しいという思いからである。もし、目に見えないものが見えたら、きつと、みんな幸せな気持ちを実感するだろう。神様が見えたら・・・悔しさは、悲しさは、きつと喜びに変えてくださるはずだ。神の力は無限大である。心から感謝できますように。

女性部から

Join us!

マリア・アントニア
山本 陽美

初めて広報委員から女性部の活動を通しての寄稿を依頼された時、とつてもナイスな企画ではあるけれど、どうして来年度からじゃないんだらう、と逃げ腰でしたが、この二年にわたりお世話になった方々に感謝の気持ちを伝えるチャンスだし、さらなる女性部の発展のために、良き人材確保を目指せるかも（？）と思い直して、拙いながらも正直に思いを書かせて頂き

す。

まず神父様、シスター方、信徒会長ご夫妻、事務の方々、教会のご奉仕くださる全ての方々、そして昨年度と今年度役員を共にして下さった仲間にも心より尊敬と感謝の気持ちをお伝えしたいと思えます。ありがとうございます。教会に通うようになって皆様有余りに一生懸命ご奉仕されているので本当に驚いたし、同時に私にできるのかな？と、とても不安になりました。女性部のお話が来た時に、子供達や私自身が大変お世話になっていから、というだけの理由でお引き受けしました。八幡さんをお手伝いする係りだと聞いたので、自分にできるとかできないとかまで考えが及びませんでした。実際お仕事はお菓子の買出しとイベント毎のお手伝い程度だし、他の方々も私も仕事や家庭の事情で出られない時は「ごめんなさい」で許されるので、思ったより大変では無かったのかな。

無いんだと自分に言い聞かせてきました。それでもモヤモヤした時は女性部の仲間にも愚痴つた事があつたかも？でも、いざれにせよ人から言われた事にはかなり簡単にへこむ私でさえ、泣き腫らした夜は無かったので（笑）、気持ちがいまいちかたして。女性部二年目で部長という役が名付けられてしまった時、お仕事は完璧にはできないかもしれないけど、一緒に女性部を盛りたてようとしてくれる仲間と、とにかく楽しく一年を終えたい」というのが私の目標になりました。メンバーにとっても恵まれたので、どうにかその目標は近いところまで達成できている気がします。それにただ毎週通っているだけではお話ししなかつた様な方々とお手伝いを通じてお知り合いになれて意外な発見も多々ありました。来年度も今年度に引き続き自称「教会をよく知らない私達」のとても素敵な方々で運営される事が決まりほつとしていきます。

には是非女性部の活動を楽しんで欲しいですし、「新しい人はこれだから！」と呆れた方には今一度手を上げてお力を貸していただけたら、と願っています。全ては神様のもつで「お二人もかも」

典礼委員会から

黙想会の企画

クララ

片岡 法代

十一月七日(日)の午後から 典礼委員会企画の「感謝の祭儀」講話を指導司祭・プリヨ神父様でおこないました。ミサの大切さ、「学びたい」「学んでいただきたい」「これが趣旨です。毎週の主日のミサ、ここ数年典礼委員が当番制でミサ準備、案内と担当し、侍者、先唱者、朗読者、オルガンリスト、答唱者、奉納者、聖体奉仕者など多くの人が携わり、ミサの間、緊張に包まれていきます。緊張のあまり神父様の声が遠くに聞こえたりします。ミサの間こんなのでいいでしょうか？不安？そこで、典礼委員会の時に神父様に講話を

お願いしてみました。(最後の晚餐・ユウカリステア)感謝(ユウカリステア)の祈りを唱えご聖体をいただく、このいのちのパンの愛のわざ、自分のためだけでなく、人のために生きる。神の神秘を日々準備できること、常に自分の生活の中に何かを欠け、与えようという心



「私たちはインドネシアから来ました。声をかけてください」

皆さん、神学生と話しをして、良い日本語の先生になってあげてください。

皆さん、神学生と話しをして、良い日本語の先生になってあげてください。

皆さん、神学生と話しをして、良い日本語の先生になってあげてください。

侍者会 中高生会から

レオ
片岡 達哉



12月18日から泊り込んでの侍者会の成果なのかな?翌日のごミサはまるで聖歌隊



城北橋教会のみなさん、クリスマスおめでとございます。いつも、中高生・侍者の活動を温かく支えてくださり本当にありがとうございます。中高生会・侍者を担当してもう三年が経ち、日々中高生をまとめる難しさに四苦八苦しなげらやってきましたかと思えます。さて、本日にこの一年は小学

当するのが「暗黙のルール」になつています。中高生と侍者を担当する自分には、中高生が小学生に教えていくことが当然だと思っていたが、中高生が忙しく教会になかなか来られない



生に侍者を助けてもらったなと感じました。「侍者」は典礼奉仕の中の一つで、城北橋教会では、毎週小中高校生が複数で担

という現実には直面し、自ら小学生に教えていくことが多々ありました。僕の思う侍者は、神父様や信者のみなさんに「魅せる・見られる奉仕だ」と思っています。動きは難しくないけど、どう動いたらもつと気持ちよくミサを進めて、また受けてもらえるのか、これが難しいのです。これからも、自分が先頭に立って、「城北橋の侍者はいいな」とみなさんに思ってもらえるように

したいです。また、中高生が冬季活動でやきいもを販売してきて、教会のみなさんのおかげで、毎週五十本以上を焼いてもすぐ売れてしまつほどの人気企画に成長しました。みなさんに楽しんでもらえるような企画を考えていきたいと思つたので、これからも中高生の活動にご協力をお願いします。

終わってしまったなと思いつつ、城北橋教会内だけでなく教区でも活動を始め、神様を感じる機会が多かつた年だったとも思えます。そしてたくさんの方々にお世話になりました。まだまだ未熟な自分ですが、みなさんのお役に立てるよう頑張っていきたいので来年もまたご指導等よろしくお願ひします。二〇一一年がみなさんにとって素敵な一年でありますように・・・

日本カトリック司教協議会から十二月八日、「アヴェ・マリアの祈り」(試用版)が発表されました。「天使祝詞」が口語文の「聖母マリアへの祈り」に変わり、「恵みあふれる聖マリア・」と十七年間にわたって祈つてきました。聖書により忠実に、またラテン語の原文の内容を生かして改訂されることになりました。

アヴェ・マリアの祈り(試用版)

「聖母マリアへの祈り」を「アヴェ・マリアの祈り」へ この祈りはラテン語では「Ave Maria」で始まります。Aveという呼びかけは、「おめでとつ」とか「お喜びください」と訳されますが、臨終や通夜の時には、「おめでとつマリア」とか「お喜びくださいマリア」では唱えにくいので、「アヴェ・マリア」とそのまま片仮名で表記しました。

「恵みあふれる聖マリア」を「アヴェ・マリア、恵みに満ちた方」へ ラテン語により忠実な訳とします。「主はあなたを選び、祝福し」を「あなたは女のうちに祝福され」へ ラテン語の祈りには無い「選び」という言葉を用いてきましたが、文語の祈り「御身は女のうちに」を「あなたは女のうちに」に近づけたいです。また、あなたの子イエスも祝福されました。を「ご胎内の御子イエスも祝福されています」へ ラテン語原文に忠実であり、また日本語になじむよう文語の祈りにある「御子」とします。なお聖書のギリシア語原本では過去に行われた行為の結果が現在も続いているという意味で「祝福されています」とします。アヴェ・マリアの祈りアヴェ・マリア、恵みに満ちた方、主はあなたとともに祝福されます。あなたは女のうちに祝福され、ご胎内の御子イエスも祝福されています。神の母聖マリア、罪深いわたしたちのために、今も、死を迎える時も祈ってください。アーメン。

個人として、共同体として、まず試用をしていただき、祈りとしての唱えやすさ、語感、日本語としての表現などについて、来年の三月二十五日までに意見を寄せて欲しいとのことです。城北橋教会として、この問題にどう対処するのか、プリヨ神父様から指示があると思いますので、まず個人的に試用してみたらどうでしょうか。(後藤)

葬儀問答シリーズ

と

洗礼者ヨハネ 田口 保

問) 仏教には「位牌」、神式では「霊爾」がありますが、キリスト教にもそれに代わるものがありますか。
答) 何もありませんが、たとえ



中山一郎さんと浅野正士さんが所属される遊々会のグループ展が今年も十一月十四日から十九日まで名古屋市民ギャラリー栄で開かれました。
城北橋教会や大垣教会、春日井教会などに寄贈されている中山さんの絵をご覧になっている方も多いと思いますが、今回出展された「茜さす柵田」は今ま

十字架に霊名・氏名を書き込むなどして、故人を偲んで祈ることは否定されないでしょう。
問) それでは、キリスト教では死者や先に亡くなった方を大切にしないのですか。
答) そのようなことはありません。愛する家族や先達者の肖像画・写真を飾ったり、花を飾ることなどを祈りをするのが往々にして行われています。

大切なことは、仏壇・位牌ではなく、いずれかの方法で先に亡くなった者を思い起こして記念するということに尽きると思います。そのためにプロテスタント教会では逝去者記念があり、カトリックでは命日祭のミサがあります。また、カトリック教会では毎日のミサの中で先に召された者のために祈りが捧げられています。従って、特別な日

第七回遊々会グループ展 中山一郎 浅野正士さん

難しいと言われていたお孫さん?の絵よりも、「ネエコ」という正面を向いた婦人像は思わず立ち止まってしまうほどの存在感がありました。人が一番多く見るのは顔です。顔を描くのはとても

しょうか。茜色という秋の夕日をイメージしますが、水のはられた柵田の風景です。初夏の夕暮れなので、しょうか、といつよりは、早朝、なんか万葉の世界をも連想してしまいませんか。



デッサン力のある

報告とお礼

主の平和

今年の夏は本当に厳しい夏

でした。ちょうどバザーの前日に大雨が降りましたが、バザー当日は雨もやみ、

絶好のバザー日和でした。皆様いかがお過ごしでしょうか。十月十日に城北橋教会で行な

われたマックバザーにおきましては、ご協力本当にありがとうございました。おかげ様

で、献品もたくさんいただきました。また、

多くの人々来ていただき楽しい一日を過ごすことができました。こ

れも一重に皆様方のご協力の賜物と心からお礼を申し上げます。また、毎年毎年

お世話になる城北橋カトリック教会の主任神父様、信者の

皆様、そして献品してくださいました方々、それぞれの持ち場で

ご協力くださった若い人

達、ご来場下さった方々と本

当に沢山の皆様のご厚情により、例年にも増す大きな実りをいただくことが出来ました。心より感謝申し上げます。

マックバザーの収益

852,330円

- 名古屋マックも今年で開所二十四年目、来年こそは皆様のご支援に心える新しい方向を迎えることができればと祈り活動を続けております。これからも皆様の温かいご支援を心よりお願い申し上げます。
- 食べ物コーナー 二十九万六千五百円 物品販売 五十二万五千七百五十円 寄付金 三万六千六百九十五円 通信費 千四百円 純利益合計 八十五万二千三百三十円
- なお城北橋教会のご協分詳細は、ところてん 五千元、ぬいぐるみ 六千六百二十円、おでん 四万九千三百五十円、コーヒーマシン 五万五千円、合計 八万五千二百二十円です。

名古屋マック後援会

では、違っていることがあげられましよう。共通していると思われる点は、死者に対する悲しみ方や、その表現方法や、遺体を洗うこと、香を使うこと、布で死体を覆うこと、丁寧に納棺することや、墓に墓石を立てることなどがあげられましよう。キリスト教における葬儀の特徴をあげるならば、遺体(死者)を丁寧に葬り、遺族への慰め・励ましを祈り、キリストが約束された復活の希望に生きることにあります。両親祖父母を敬うことと、両親祖父母が死んだ後に供養することは同列に扱っていません。全く別なこととしてとらえております。すなわち、死んだ後のことは全て神のみ手の中にあり、生者の行為が及ばない範疇にあります。思いやりの心・感謝の気持ちをもって死後の世界での平安を祈ることは良いと思います。しかし、この世にある者の祈り・供養によって、例えば地獄にいる死者が、天国に迎え入れられるということは聖書から見いだせませんし、その祈りがかなえられる保証はありません。が、それでも残された者・交わりのあった者は、故人を偲び祈りをし主の恵みに感謝しております。日本で見受けられる先祖供養とカトリックの相違点などは、かなり長文になるため別の機会に書き記したいと考えています。

信者動向

【洗礼】

十月二十七日

マリア・ローザ・ミカエラ

伊藤 まさを

十二月十二日

マリア・アリサ・ジュリエット

山本 亜梨彩

【転入】

十月二十四日

札幌教区 北十一条教会より
アウグスチヌス 池田 正美

【転出】

七月二十二日

東京教区 小平教会へ
マリア 古賀 明美

【結婚】

八月二十九日

山田 法樹

アグネス 山田 聖香

九月二十五日

岡田 篤

ペラギア 酒井 梢江



十月九日

黒宮 幸司

ユリアナ 小出 紗佑里



十月二十二日

山口 泰生

ペトロ 長井 香枝



十一月七日

井上 将博

ミカエル 伊藤 倫子

【帰天】

八月十一日

アウグスチヌス 木全 茂

(七十八歳)

十一月十日

伊藤 まさを (九十三歳)

編集後記

今号は書いて下さる方が少なくなりました。復活号は「小教

区で支えるケアについて考える」を受けて、高齢者問題を取り上げる予定ですので、投稿をお待ちしています。最後にお断りしますが、文章には筆者名を記し、記述の責任を明らかにしております。それはカトリックの公式な見解と異なる場合もあり、故人の意見であることを明記するためです。(後藤)



奉獻の約束をする坂井民子さん

に恵まれ、聖心の聖母会のシスターも福井から来てくださり、福井教会、大垣教会のみこころ会の皆様と共に、イエスの聖心の弟子として、イエス様に従って生きることを約束しました。この「みこころ会」は、いわゆる第三会と呼ばれる在俗信徒の会で、聖心

(ヤコブ後藤明憲)